

# 和の文化 縄文

さんないまるやま いせきはつくつ しようげき  
三内丸山遺跡発掘の衝撃

相互に助け合う争いのない和の社会が見える

## ●三内丸山遺跡と縄文の豊かな生活

青森県の三内丸山遺跡は、巨大な縄文の集落跡で、6000年前から4400年前ごろまでの約1600年もの間、存在しました。その面積は、東京ドーム9個も入るほどの広さ（42<sup>ヘクタール</sup>）です。ここには、多くの住居のほか、35棟の高床式倉庫と10棟以上の大型建物跡が見つかっています。最大のもは、広さが約90畳もあり、集会場や共同作業場として使われ、遠方から訪れた人々をむかえる場とも考えられています。

他に道路、貯蔵穴、墓、盛土、ゴミ捨て場なども計画的に整然と配置されています。直径1.5mの栗の巨木を使った建物跡も見つかりました。再現してみると15mもの大型掘立柱建物となり、当時の土木・建築技術の高さがわかります。これは、夏至の太陽が正面から昇るような神殿設計がなされていることから秋田県・大湯遺跡のストーンサークルと同じように、縄文の人々が、太陽を崇拜した証しと考えられています。

出土品には、石器・土器・土偶、木製品と漆製品、裁縫針、衣服や網代編みの「縄文ポシエット」などがあり、このうち約2000点が重要文化財に指定されまし



①食料などを貯蔵した高床式倉庫（復元）



②6本の柱の大型建物跡（柱穴の間隔4.2m、幅2m、深さ2m）。4.2mは、35cmの倍数で、この単位は、ほかの建物にも使われており「縄文尺」とよばれています。6本の柱は、上部の重さを支えるために内側に内転びという技法で傾けてあり、地面の基礎工事もそれに沿って行い、柱本体も表面を焦がし腐食防止を施すなど、大変高度な技術が用いられています。



③神殿とも言われる大型掘立柱建物

た。硬いヒスイなどの石に穴をあけたイヤリングやネックレス、かんざし、腰や手首の飾りなど多くの装飾品も発掘されました。海をへだてた遠隔地から原料を運び、加工した跡も見つかり、日本人の「モノづくり」の原点が垣間見えます。

## ●相互に助け合う社会

最盛期には、約500人もの人々が、この地に定住することができたといわれます。それを可能にしたのは、季節を通じて安定した食料が得られたことです。人々は、栗林を大量に管理し、イモ、豆、エゴマ、ヒエ、ヒョウタンといった植物を栽培して食料としました。また、動物の骨や角で作った釣針やモリなど、優れた道具をつくり、自然の恵み豊かな生活を営んでいました。

1年以上にわたる縄文時代の大きな特徴は、遺跡から戦争の武器が出土しないことです。三内丸山のような巨大遺跡からでさえ、動物を狩るための弓矢や槍以外に、戦争のための武器や敵を防ぐ柵や堀はありませんでした。私たちの祖先である縄文の人々は、自然と調和し、争いのない助けあいの精神に満ちた社会を築いていたのです。これがのちの日本の歴史にもつながったと考えられます。